

熊本城 復興に向けて

〈17〉「平成28年熊本地震」と熊本城の被害

平成28年4月、熊本地方を震源に最大震度7の巨大地震を二度にわたって発生した一連の地震は、「平成28年(2016年)熊本地震」と命名されました。熊本城に最も近い中央消防署設置の震度計では、4月14日21時26分に発生した前震が震度5強、28時間後の16日1時25分発生の本震が震度6強という強烈な震動で、地震後の二の丸広場での測量によれば、北東方向に47.7cm動き、11.6cm沈下するという地盤変動が起こっていました。

熊本城では明治22年の大地震でも大きな被害がありましたが、今度の地震はさらに大規模で、特別史跡熊本城跡の重要な構成要素である石垣に被害が集中し、その石垣上などに建造されていた重要文化財13棟および復元建造物20棟にも甚大な被害が及びました。

まず前震の段階では、大天守付櫓の石垣や小天守の入口石垣、頼当御門周辺石垣、飯田丸五階櫓台石垣の南面、戌亥櫓東石垣など6か所で崩落があり、崩落しなかった石垣でも背後にたくさんの亀裂が発生していました。さらに強い揺れとなった本震では、前震で被災した石垣を含めて50か所229面の石垣が崩落し、517面の石垣で膨らみや緩みといった変形が起きました。実に石垣面積で3割の石垣は破損し、修理が必要となりました。

重要文化財の場合、前震で長堀が80mほど倒壊し、本震では東十八間櫓・北十八間櫓が石垣下に倒壊し、宇土櫓の続櫓や不開門の櫓部分も倒壊し、倒壊しなかった櫓も建物の傾斜や屋根・外壁の破損といった重大な被害がありました。

また、本市で鋭意取り組んできた櫓や堀といった復元建造物にも被害がありました。なかでも昭和35年に外観復元されていた鉄筋コンクリート造の天守閣は、前震で大天守最上階の屋根瓦が土煙を上げて落下し、痛ましい姿となりました。本震後は全ての堀が倒壊や傾斜し、飯田丸五階櫓・戌亥櫓・西大手門・南大手門・元太鼓櫓などは土



▲前震後の戌亥櫓東石垣の被害



▲本震後の戌亥櫓と東石垣の被害



▲石垣の被害(赤色は崩落、桃色は変形、黄色は地割れ)

台となる石垣の崩落によって倒壊の恐れが生じていましたが、元太鼓櫓は本年6月の大雨の影響で倒壊してしまいました。三の丸に移築されている熊本県重要文化財「旧細川刑部邸」も堀の倒壊・傾斜、外壁破損がありました。

明治22年熊本地震は「熊本市地震ハザードマップ」にも掲載されている立田山断層の活動が原因と指摘する研究者がいます。この断層は、立田山北麓から市中心部を南西に抜け、花岡山・独鈷山・城山の北西縁を通り、高橋町に延びる活断層と想定されています。今回の地震では活動していませんが、熊本城は足元に大きな地震リスクを抱えていることになります。

地震直後に実施した二の丸西端石垣での崩落石材の回収作業では、表から見えない側面に人の姿を彫刻した石材が発見されています。400年前の石垣工事の時、石工たちが石垣の平穩を祈ったのかもしれません。地震や台風、集中豪雨といった天災に立ち向かうには限界があるかもしれませんが、現在、熊本城では現代の英知を結集しながら、文化財である伝統的 stone や歴史的建造物の価値を損なわない形で復旧事業が進行しています。

(熊本城調査研究センター 鶴嶋 俊彦)